Rotary International District 2790 Chiba

大網ロータリークラブ

Club Weekly Bulletin

■クラブ創立：2000 年 1 月 13 日
■例会日：毎週水曜日（12：30～13：30）
■例会場：中部コミュニティセンター TEL0475-73-3337　FAX73-4360
■事務所：〒299-3251 大網白里町大網 450-6 ユアサビル 2 階　TEL0475-70-0200
■会長：宮間 文夫　幹事：大越　将司
■広報・公共イメージ向上委員会　委員長　石田 英世　副委員長　小高　徹

2018 年 12 月 5 日(水)

第 20 巻 第　21 号

通巻第８８２

http://www.oamirotary.com
E-mail　rc@oamirotary.com

インスピレーションになろう

本日の例会

点　　鐘　会長　宮間　文夫
唱　　和　四つのテスト
ソ ン グ　奉仕の理想
会長挨拶　会長　宮間　文夫
幹事報告　幹事　大越　将司
プログラム
卓　　話
大網白里市 高齢者支援課 出前講座
「認知症サポーター養成講座」

ニコニコ BOX

なし

例会日	11 月 28 日	11 月 14 日
会員数	30	30
出　席	20	19
欠　席	10	11
MU	0	5
免　除	0	0
出席率	66.67	80.00

会 長 挨 拶

宮間会長所要の為、矢部会長エレクト代読

皆様、こんにちは！　いかがお過ごしでしたでしょうか？
大相撲九州場所も高景勝の優勝で幕を閉じました。
来年の初場所では、横綱稀勢の里の活躍を期待します。
四之宮会員が心臓の動きが通常の半分という事が分かり、ペースメーカーを入れて、元気に活動されています。凄いパワーを感じます。
早い医師の対応と医学の進歩に感謝します。
今日は、古山豊先生が卓話をしていただけるという事です。
どうか宜しくお願い申し上げます。
それでは、会員の皆様におかれましては、ご自愛下さいます様、ご祈念いたします。
ありがとうございました。

卓　話

大網白里市郷土史研究会会長
大網白里市・東金市文化財審議会委員
古山　豊　先生

「宮彫師　波の伊八」

“ 関東へ行ったら波を彫るな ”

とまで、彫工達に言わしめた宮彫師伊八の芸は・・

1. 初代「波の伊八」（武志伊八郎信由）とは

波の伊八　こと初代の武志伊八郎（良）信由は、宝暦元（1751）年、安房国長狭郡下打墨村（鴨川市打墨）で生れた。武志家は代々地元で名主を務めた家柄である。現在はその跡地に、武志家の墓所がる。
彼は、子供のころから手先が器用だったようで、左甚五郎の流れを汲むといわれる。植野村（勝浦市）の彫刻師嶋村丈右衛門貞亮（市東半平）に弟子入りし腕を磨き、安房・上総をはじめ江戸や相模など南関東を中心に、50 点余の彫刻を残し、文政 7（1824）年、73 歳で没している。

2. 行元寺の伊八

いすみ市萩原にある行元寺（天台宗）の欄間彫刻
寛政 12 年（1800）に建立された旧書院（客殿）は茅葺屋根造りで、内部の杉戸には老梅と鷹、獅子などが描かれている。欄間彫刻は「伊八」の作である。（千葉縣指定文化財）
欄間五面（波、鶴、朝日、松、梅）三面　　裏二面（「波に漂う宝株（51×175 センチ）二面）、「波に旭と鶴」（51×274 センチ）　　文化六年己巳年四月吉祥日（1809 年、58 歳）

会員増強・維持拡大委員会

大塚 和良 委員長 より

会員増強の用紙をＦＡＸしますので、来月の例会にご持参くださるようお願いします。

子ども食堂開催

皆様のご協力をお願い致します。

12/1 開催 G補佐会議にて

写真提供：髙山ガバナー補佐

【波に漂う宝珠】をまさに“裏”から見た構図　似ている

葛飾北斎の代表作【富嶽三十六景】【神奈川沖浪裏】千葉県立上総博物館所蔵

3. 伊八と葛飾北斎の間柄

行元寺で“伊八の波”が完成されてから 22 年後、葛飾北斎の代表作『富嶽三十六景』が出版された。なかでも「神奈川沖浪裏」は、行元寺の欄間をまさに裏側から見た波の構図と一致する。

江戸後期の浮世絵師・葛飾北斎は下総国葛飾の生まれで、伊八より 10 歳年下である。

一時期、伊八と北斎は神奈川県浦賀の真福寺で生活を共にしたようで、北斎が描いたと思われる下絵で、伊八は『黄石公と張良』の欄間を彫っている。その後、北斎が房州に足を踏み入れたのは文化 3（1806）年である。ほかにも頻繁に訪れていて、文政頃には遠州から絵師が来て伊八を訪ね、海を渡ったという伝説も残り、その絵師は北斎ではないかと考えられている。

行元寺には、等随の描いた『十六善神』の仏画がある。伊八が欄間を完成させた 5 年後の、文化 11（1814）年にこの仏画は開眼。そして北斎と等随は、堤等琳の兄弟弟子の間柄であった。このような関係をたどると、伊八と北斎が交渉を持ったことが推察され、北斎は伊八の波に刺激を受けたと思われる。そして、北斎の波は「神奈川沖浪裏」によって完成された。

江戸末期に多くの浮世絵が海外へ流出した。特に安政 2（1855）年、日本は初めてパリの万国博覧会に参加するが、驚くことに展示物を浮世絵で包装して送ったのである。日本人にとって古新聞は程度の価値しかなかった浮世絵であるが、会場関係者の注目を集め、やがてジャポニズムが流行する。ゴッホ、モネ、ドガ、ルノワール、ゴーギャン、エミール・ガレ等に大きな影響を与えた。

4. 岬町　飯縄寺の傑作

初代伊八の「天狗と牛若丸」「波と飛龍」（阿行）「波と飛龍」（吽行）

「天狗と牛若丸」横 349 ㎝×縦 108㎝　欅彫り大作

義経伝説に由来した鞍馬山での大天狗と牛若丸が刻まれている。両側の「波と飛龍」は左右で阿吽になっており、いずれも縦横 108×197 ㎝である。右の波は、後年「波の伊八」と称された伊八の波の特徴が見てとれて趣がある。

材は、3 点とも吟味された欅の一木を使っていて、その木目や厚みが効果的に活かされ、作品に素晴らしい陰影と遠近感を与えている。

「波と飛龍」（阿行）「波と飛龍」（吽行）龍とは、「角は鹿に似て、頭は駝に似たり。眼は鬼に似て、項は蛇に似たり、腹は蜃に似て、鱗は魚に似たり。その爪は鷹の似く、掌は虎の似く、その耳は牛に似たり」碩学曲亭馬琴（滝沢馬琴）は『南総里見八犬伝』のなかで龍の見分け方をこのように解説している。想像上の動物である龍は、古来、水墨画や屏風絵、社寺建築をかざる彫刻や絵画、陶磁器など、さまざまなかたちで表現されてきた。

5. 龍三体の図欄間三間一面

初代武志伊八良信由作

彫刻の後銘には、文政六年十一月と記されているが、「長南町の文化財」には、「欄間は、文化 11（1814）年 6 月着工、同年中に完成したが、事情があって約 9 年後銘を刻んだものである。」と説明されている。どのような事情が気になるところである。

「中央正面の昇り龍は、尾が天上まで巻き上がり、四肢と火炎とのひらめきが無限の拡がりを連想させ、これに対する左右の下り龍が、荒波に勇躍している傑作である。

初代信由の作品には、彩色を施しているものが多く、この八方にらみの龍の鱗は、右が紅、中央を青、左を白で染めている。明治の巨匠小倉惣次郎が“日本最優秀の龍”と推賞した名作である。」（『長南町の文化財』長南町教育委員会より）

6. 伊八の後継者系譜

初代　武志伊八郎（良）宝暦元～文政 7 年（1751～1824）

2 代　武志伊八郎信常　天明 6～嘉永 5 年（1786～1852）。初代伊八の子として生まれる。茂原市藻原寺の彫刻をはじめ、いすみ市内にも作品を残している。

3 代　武志伊八郎信秘（信美）文化 13～明治 22 年（1816～89）。下打墨村の名主を務め、上総国分寺の欄間彫刻など手掛けている。

4 代　武志信明　文久 2～明治 41 年（1862～1908）。千葉県多古町に生まれる。初めは大工として修行していたが、その腕を見込まれ 3 代目信秘の弟子になり、後に次女と結婚し後を継ぐ。

5 代　高石信月　明治 23～昭和 39 年（1890～1964）4 代目信明の子として生まれる。

安房地域に数点作品を残している。

しかし後継者に恵まれず、彫刻師武志家はここで絶えることになった。

（宮彫師　波を彫っては天下一　「波の伊八伝」千葉縣いすみ市発行　他参照）